

## 投稿

## 『理科年表』2006年版の検討

佐藤明達

## 1. はじめに

『理科年表』は権威あるデータブックとして理工学関係者に広く愛用されている。内容は、「暦部」「天文部」「気象部」「物理／化学部」「地学部」「生物部」「環境部」から成り、科学のほとんどを網羅している。したがって、本書は『科学年表』と呼ぶのがふさわしい。このうち「暦部」「天文部」をよく見ると、いくつかの不備が散見される。

## 2. 「暦部」の検討

(1) p.1 (以下すべて通しページ) : 「中央標準時」は「日本標準時」と書くべきである[1]。これではどこの国の標準時か分からない(北米にも中央標準時がある。p.73 参照)。英語では Japan Standard Time と書くではないか。時代に合わない昭和 12 年 9 月 24 日の勅令第 529 号を放置しているのは報時関係者の怠慢である。

(2) p.1 : 正午月齢は「直前の朔から当日の中央標準時 12 時まで経過した時間」であるが、『天文年鑑』や『天文観測年表』と同じく 21 時(世界時 12 時)月齢にすべきだ。この方がアマチュアにはありがたい。

(3) p.2 : 夜明・日暮の時刻は「視太陽の中心の伏角が  $7^{\circ} 21' 40''$  になる時刻である」。これは江戸時代、寛政暦以後の明六つ、暮六つにあたり、不定時法の当時は夜明から日暮までを昼間、日暮から夜明までを夜間とした。これは伏角が  $6^{\circ}$  となる欧米の市民薄明に近いが、国際的に通用しない日本独特の定義である。むしろ伏角が  $18^{\circ}$  となる天文薄明の方が、観望会などの予定を立てるときに便利ではないか[1]。

(4) p.2 : 「留の時刻は惑星の中心視赤経の

時間変化が 0 となる時刻である」は厳密な表現だが、直観的ではない。「地心視赤経方向の動きが止まる時刻である」とした方がいい。

(5) p.2 : 「最大離角」は「最大離隔」とする[2][3]。見掛け上、内惑星が太陽から最も離れた時が最大離隔で、その時の角度が最大離角である。

(6) p.58 : 日食・月食。『理科年表』では散文的な用語、「新月」「満月」の代わりに「朔」「望」を用いている。同様に、日月食の状況の名称も 1960 年代まで使われていた用語(下記表の旧称)を復活して欲しいものだ[4]。この方がずっと発音しやすく、しかも雅語的で気持ちいい。

現行	旧称
食の始め	初虧
中心食の始め	食虧
子午線中心食	食甚
中心食の終り	生光
食の終り	復円

(7) p.64 : 掩蔽。両字とも常用漢字表にないから、鈴木敬信氏が提案した「星食」を用いる方がいい。これだと「恒星食」「惑星食」あるいは「小惑星による恒星食」などと、いろいろ応用することができる。

## 3. 「天文部」の検討

(1) p.93 : 黒点。幾何学的に言えば、点とは位置のみで大きさのないものである。木星面の赤い斑点は大赤斑と言う。したがって、黒点も黒斑と呼ぶのが正しい。太陽面には白

斑、粒状斑、羊斑もあるではないか。

(2) pp.102~103 : 星座。

(ア)「略符」という語は広辞苑にはない。

学名は符号ではない。「略名」に直したい。

(イ)「髪」は「かみのけ」とは読まない[2]。

「かみのけ(髪の毛)」と書くべきである。

また、学名の属格(所有格)は *Berenicis* ではなく *Brenices* である。

(ウ)「きよしちょう(巨嘴鳥)」は学名 *Ramphastos*、英名 *Toucan* である。したがって、これは「おおはし(大嘴)」と呼びたい[2]。

(エ)「船尾」は「とも」とは読めない[2]。

漢字では「鱸」と書く。

(オ)「ほうおう(鳳凰)」は古代中国の霊鳥で、エジプト伝説の *Phoenix* ではない。「不死鳥」と言うべきである。

(カ)「水蛇」という語は辞書にないから、昔使われていた「小海蛇」に戻した方がいい。

(キ)「南十字」はただの十字ではなく、キリストの十字架である。学名 *Crux*、英名 *Cross* に忠実に「十字架」とすべきである[2]。「南十字」はニックネームである。

(ク)「レチクル」は聞き慣れない名である。昔は「小網」と呼んでいた。これは日本語で「十字線」としたい。

(ケ)和名は学名に忠実に「おうし」「おひつじ」と訳されたが、「めうし」「めひつじ」という星座はないから、簡単に「うし」「ひつじ」でいい。「こぎつね」も「おおぎつね」はないから「きつね」でいい。これは故・山本一清博士の意見である。

(3) p.108 下から 19 行目 : プロシオン (*Procyon*) はプロキオンとする。*Cepheus* はケフェウス、*Centaurus* はケンタウルスと読むから。

(4) p.109 注、下から 1 行目、3 行目 : 「せん光星(閃光星)」は p.111 下から 6 行目にならって「フレア星」とする。

(5) p.111 上から 2 行目と下から 10 行目 : 「変光星」は「光変星」とは言わないから、「磁変星」は「変磁星」とする[2][3]。

(6) p.126 : 銀河系内の星雲。

(ア) プレヤデス星雲はプレヤデス星団 *M45* を取り巻く星雲で、*NGC1432* はそのうち *Maia* を囲む星雲のみを指す。なお *Merope* を囲む星雲は *NGC1435* である。

(イ)「8の字星雲」*NGC3132* は英名を *Eight-burst planetary* と言うから、「8噴星雲」と言うのが正しい。

(ウ)「干潟星雲」*M8* は英名を *Lagoon Nebula* と言うが、*lagoon* は干潟ではない[3]。「潟湖(せきこ)星雲」と言うのが正しい。

(7) p.137 上から 26 行目 :  $\rho$  *Ophiuchus* は p.103 によれば  $\rho$  *Ophiuchi* または  $\rho$  *Oph* が正しい。

(8) p.152 上から 5 行目と下から 5 行目 : *Bulletine* の綴りは英独仏いずれも *Bulletin* である。

(9) p.162~163 : 「天文学上のおもな発見と業績」

発見は業績の中に含まれて表(おもて)には出てこないから、タイトルは「天文学上の主な発見と業績」でいい。また「発見者」は「発表者」の方がいい。それにしても、物理年表は 9 ページ、化学年表は 6 ページもあるのに、天文年表の 2 ページは少なすぎないか。

(ア) アルマゲストが完成したのは AD120 年ではない。2 世紀前半頃としか言えない。

(イ) 1582 年グレゴリオ暦の制定はローマ教皇領で行なわれたが、当時ローマという国はなかった。したがって、発見者(?)はグレゴリウス 13 世(バチカン)とすべきである。

(ウ) 1603 年「バイエル星図」は重要でないから削除。

(エ) ケプラーによる惑星運動の法則の発表は 1609 年および 1619 年である。

(オ) G.D.カッシーニはルイ 14 世の招きで 1669 年フランスへ行き、1671 年完成したパリ天文台で火星を観測し太陽視差を求めた。帰化は 1673 年だが、彼の国籍はここではフランスとしていいだろう。

(カ) ニュートンは 1687 年『プリンキピア』を出版し、その中に運動の法則と万有引力の法則を発表した (p.544 の物理年表参照)。

(キ) ブラッドリーによる光行差の発表は 1729 年、章動の発表は 1748 年である[6]。

(ク) 追加してほしいもの。

年代	事項	発見者 (国)
1825	「天体力学」5 巻	ラプラス (フランス)
1917	アインシュタイン宇宙	アインシュタイン (ドイツ)
1939	中性子星	オッペンハイマー (アメリカ)
1946	ビッグバン理論	ガモフ (アメリカ) (p.551 の物理年表参照)

#### 4. おわりに

科学者といえども用語に関してはかなり保守的 (Inertia が大きい) で、なかなか改めようとしなない。いささか細かいことばかり述べたが、浅学な筆者の気付いたものはごく一部に過ぎない。『理科年表』検討ワーキング・グループを立ち上げるのも (教育的に見て) 意義があるだろう。

2006 年 8 月、チェコ・プラハで開かれた IAU 総会で、惑星の数は冥王星を除いた 8 個と決まった。当然 2007 年版『理科年表』

も改訂されるであろうが、ついでにここで挙げたような事項も訂正してくれるようお願いしたい。

#### 参考文献

- [1] 佐藤明達、1999、時・暦用語へのこだわり、『天界』、No.895, p.781~782
- [2] 佐藤明達、1990、天文用語について、『天文教育普及研究会回報』、No.3, p.13
- [3] 佐藤明達、1995、「学術用語集 天文学編」の検討、『第 9 回天文教育研究会年会集録』、p.159
- [4] 佐藤明達、1999、日食月食用語の復活を望む、『天界』、No.885, p.105
- [5] 佐藤明達、1999、干潟星雲一名は体を表わすか? 『天文教育』、Vol. 11, No.3, p.36
- [6] 佐藤明達、1998、光行差はいつ発見されたか、東亜天文学会研究報告『ステラ』、No.6, pp.99~102